

一棕。箒。例年七本相廻處、當年六本仕丁持廻ニ付、例年七本之旨、自諸司申之處、表より受取候所、右之通故、尙表へ御通達被下度旨仕丁申之故、宜御汰汰可被下旨出納申之、仍番頭代へ其段申通令吟味處、則乞物帳ニ棕箒七本と有之故、間違と被存也、何分早速相廻候様、下知可給申之、早々相廻也、尤此序、羽箒長箒之員數も、出納へ相尋處、最初三四年は悉七本宛相廻候得共、次第ニ員數相減、近來は大方年々、兩品共五本宛ニ相成有之趣申之ニ付、左様之儀於此方一向不存儀也、最初之定七本宛故、例年其通之事と存居儀也、尤年々催之節、例年之通くと計相催事故、分而員數之儀不申候、於此方者、年々悉七本ツ、相廻儀と存居候事也、左候は、其儀も任序可及沙汰併當年之所は其儘ニ而も可然、何卒來年より如元七本宛ニ相成候は、宜敷と申置、扱番頭代へ懸合置、猶最初之處吟味可給、明年々之覺悟ニ相成事と申入置、鴨指出候由承知、猶致吟味可置、則昨年之帳面被見候へば、羽箒五本と有之也、

〔皇都午睡三編上〕上方にて買て來るを、江戸にては買て來る、○中竹箒をたか箒、

〔攝陽群談十六名物土産〕前垂島蟹胥 同郡○西大坂道頓堀ノ西ニアリ、前垂島ハ今ノ地名也、此島邊ノ蟹蟄穴ヲ出テ水ニ遊ブ、漁者蘆ノ葉ニ陰テ伺時、竹箒ヲ以テ、數百ノ穴ヲ掃塞テ捕之、

〔本朝櫻陰比事三〕井戸は即ち末期の水

子も持たざれば行末もの悲しく、今も知らぬ年齢になつて、毎日伏見に通ひ、竹箒を買求めて洛中賣廻りて、今日を暮しけるが、

〔胸算用一〕鼠の文使ひ

毎年煤拂は極月十三日に定めて、旦那寺の笹竹を祝物として、月の數十二本もらひて煤を拂ひての跡を取り、葺屋根の押へ竹に使ひ、枝は箒に結ばせて、塵も埃も捨てぬ、随分細なる人ありける、

〔本朝食鑑三〕箒木訓波字